

川端康成「みづうみ」の基礎研究

——作品「みづうみ」はいかに構築されているか——

田 村 充 正

湖の多くは遠いむかし地の奥から火を噴きあげた火口に水をたたへてできた。火はしづまる時が来るが、水には時がない。

(川端康成編『湖』まえがき)¹
「みづうみ」という作品を初めて読んだときの違和感は、異質な文体と混沌とした物語構成に帰着する。

「雪国」や「山の音」という川端作品なら、ひとつの言葉に立ちどまって、その広がりや奥ゆきの豊かさを、母語である日本語の可能性を味わいながら読むことができるのに、「みづうみ」はそれを拒む。「みづうみ」の文体は、立ちどまらずに読みすすめることを余儀なくするかのようである。

この「みづうみ」の文体は先行研究²では、〈意識の流れ〉を描く文体と規定され、たしかにこの西洋の前衛文学の手法を川端は「みづうみ」執筆に遡ることおよそ25年前、「針と硝子と霧」(昭和5年)、「水晶幻想」(昭和6年)で試みているが、「みづうみ」執筆の前年にこうした試みを振り返って、「ジョイスなども、一時原書を買って来て、原文と比較してみたり、

ちよつと真似してみたようなこともあるが、結局大して影響はなかった。」（作家に聞く「昭和28年」と発言している。この言葉を踏まえるならば、川端は「みづうみ」の創作過程において、主人公銀平の〈意識の流れ〉を描こうという意図をもつていなかったのだろうか。

また「抒情歌」や「禽獣」といった作品でも、時間の交錯は物語の主要な特徴なのだが、「みづうみ」の混沌はその比ではない。「抒情歌」においては死人に語りかけている〈私〉が物語の基底にあり、「禽獣」でも千花子の舞踊会へ向かう〈彼〉の現在が回想を支えている。それらに比べ、「みづうみ」という作品の、物語内容の把握が困難になるほどの錯綜は何に基因するのだろうか。

こうした初読の個人的印象を手がかりに問題に取り組みたい。

I. 「みづうみ」の校異

「みづうみ」は、昭和29年「新潮」の1月号から12月号まで連載され、翌昭和30年4月に単行本として出版された。このさい雑誌連載の第11回末尾(p.233, 下二行)から最終回全文が削除されたことはすでに指摘されている。だが雑誌初出と単行本の校異の問題は、「みづうみ」の英訳者である月村麗子氏の論文³⁾においてしか取り上げられていないので、本稿において再度検討した。

月村論では「初版本では、初出の修正が二百三十四ヶ所ある。」と指摘されているが、今回の調査では四二五箇所であった。このうち主に雑誌初出の「……」を単行本で「……」に変えた記号修正が一一九箇所あるが、それを差し引いても三〇六箇所の修正がほどこされたことになる。修正内容とその数を章ごとにまとめると次のようになる。

								第一章	第二章	第三章	第四章
読点削除	30	0	2	36	8	0	39				
句読点変更	1	1	1	21	9	1	42				
語句修正	0	0	1	13	2	1	34				
改行削除											
改行付加											
記号修正	24	0	3	12	50	0	4				

これは雑誌初出を単行本にするさいに作家川端が加えた斧鉞を数量化した表であるが、その意図は歴然としている。すなわち、雑誌初出において付けられていた読点が単行本になるさいには一四六箇所削除され、また、二行にわたって書かれていた改行箇所が単行本においては六九箇所で前段落に追い込まれている。

こうした読点や改行の夥しい削除には、言葉と言葉のあいだ、行と行のあいだに叙述の真意を潜ませるといよりは、言葉の流れを形成し、その流れの密度を高めようとする意図が窺える。本稿第二章で検証することになるが、この作品が主人公銀平の知覚に沿って物語られていることを考えるならば、読点や改行を削除することによって形成された言葉の流れとは、銀平の意識の流れにほかならないように思われる。川端がこれを西洋前衛芸術における「意識の流れ」を描く手法の踏襲と考えていなかったとすれば、日本文学のどのようなジャンルや文体にその淵源を見定めればよいのであろうか。

さて、語句修正は全体で八二箇所あるが、その内容は語句の言い換え、語句の挿入、語句の削除、助詞の変更、接続詞の挿入、明らかな誤字、数字の修正などである。このうち作品の読解にかかわる興味深い修正としては、

雑誌初出

① あれはいつだったか。(2/p. 255)

② いろいろな思ひ出があるものだ。(7/p. 260)

③ 十一二の銀平は(6/p. 258)

④ 少女をもとめて坂道へ行くことはやめた。(7/p. 260)

⑤ みつともない足の指を見ると、

ぞつととするんだ。(2/p. 256)

単行本

あれはいつの幻であったか。(p. 13)

(削除)

十一の銀平は(p. 120)

少女は坂道に現はれることはなかった。(p. 148)

みつともない足の指を見ると、いつも

ぞつととするんだ。(p. 17)

が挙げられる。①は湯女に平手でぴたぴた叩かれながら、銀平が自分の額を打つ幼子のことを思い出す場面であるが、雑誌初出では過去の実際の出来事とされているのに、単行本では「幻」と書き換えられている。②は蛍の名所であった母の村のみづうみで、蚊帳のなかに蛍を放してやよいとその数をかぞえたことを回想する場面で、雑誌初出には②の銀平の独白が付されているのだが、単行本ではこれを削除して、銀平が穏やかな過去の感慨にふける機会を奪っている。また③は銀平が父の敵を討つ決心をした年齢についての記述であるが、雑誌初出の「十一二」という概数が、単行本では「十一」と限定されることになる。④の町枝をもとめて蛍狩りに出かける直前の場面では、「少女をもとめて坂道へ行くことはやめた。」という銀平の意志をあらわした表現が、単行本では「少女は坂道に現はれることはなかった。」という客観描写に変わり、銀平が自覚的に自分の行動をおこなっているという印象が消される。⑤では「いつも」という副詞が付されて、銀平の自分の醜い足への固執が強調されている。

このように修正された「みづうみ」は、ではどのように物語られているのだろうか。

II. 「みづうみ」の語り

「みづうみ」という作品は次のように語り出される。

桃井銀平は夏の終り——といふよりも、①ここでは秋口の軽井沢に姿をあらはした。先づフラノのズボンを買つて古ズボンとはきかへ、新しいワイシヤツに新しいセエタアを重ねたが、つめたい霧の夜なので、紺のレイン・コウトまで買った。出来合ひで服装をととのへるのに、軽井沢は便利だった。靴も足に合ふのがあつた。古靴は靴屋に脱ぎすてておいた。しかし、古着は風呂敷にくるんで、②これをどうしたものか。③あき別荘のなかにはふりこんでおけば、来年の夏まで見つかりはすまい。銀平は小路に折れて、あき別荘の窓に手をかけてみたが、板戸は釘づけにされてゐた。それをやぶるのが、今はおそろしかつた。犯罪のやうに思へた。(p. 9)

作品の冒頭は一般的には、語りの形式や視点の方針が提示される重要な箇所であるが、ここで語り手はまず「桃井銀平」という主人公の名前を挙げ、この登場人物を語りの対象として提示しておきながら、すぐさまこの登場人物との一体化を志向する。それはまず傍線部①の「ここでは」という指示語に見て取れる。話者と指示対象とのあいだに一定の距離があることを示唆する「そこ」ではなく、「ここ」という指示語をもちいることができるのは、銀平と同じ「軽井沢」にいてものであり、すでに冒頭から銀平の知覚をおして、この物語は語られている。この点は同箇所の外国語訳を参照することでさらに明瞭に浮かび上がるだろう。

〔英訳〕

Gimpei Momoi arrived in Karuzawa at the end of the summer season, although up there it seemed more like autumn. (p. 5)

(桃井銀平は夏の季節の終りに軽井沢にやって来た、そこはむしろ秋の様子であったが。)

〔仏訳〕

Au moment où Gimpei Momoi arrivait à Karuzawa, la fin de l'été prenait des allures de début d'automne. (p.

7)

(桃井銀平がちょうど軽井沢にやって来た時には、夏の終りは初秋の様相を呈していた。)

〔露訳〕

Гимпей Момои приехал в Каруизава в конце лета, но там уже явно чувствовалось дыхание осени. (стр. 376)

(桃井銀平は夏の終りに軽井沢にやって来たが、しかしそこはもう明らかに秋の息づかいが感じられた。)

英訳や露訳において、原文の「ここでは」が「そこは」に訳し変えられているのは偶然ではない。外国語訳における「みづうみ」の語り手は、全智的視点をもった三人称の語り手らしく、あくまで軽井沢にいる銀平を、語り手とは一定の距離をもった描写対象として捉えているのであり、仏訳ではそうした指示語すら消えている。

銀平の感覚と思考にそって、軽井沢の夜霧の冷たさと新しい服装を身に着けた銀平を叙述する地の文の語り手の声は、

傍線⑥の部分に至つては、「これをどうしたものか。」という銀平の声と完全に融けあつてしまひ、つづく⑦の文も明らかに銀平の内心の声にはかならない。

【英訳】

But what was he to do with his old clothes, which he had wrapped in a piece of cloth? If he threw them into some empty house, they would not be discovered until the following summer. (p. 5)

(しかし布きれに包んだ彼の古着を彼はどうすればよかつたのか? もし彼がそれらをどこかの空き別荘に放りこんだら、それらは次の夏まで見つけられはしないだろう。)

【仏訳】

Les vieux vêtements, il les avait roulés dans un bout de tissu, et se demandait ce qu'il allait en faire : «*Je pourrais les laisser dans une des villas inoccupées, on ne les y dénichera pas avant l'été prochain.*» (p. 7, 8)

(彼はこれをどうしようかと自問していた。『私がそれらを空き別荘のひとこ所に置いておくことができれば、来年の夏まで(ひとが)それらを見つけたことはないだろう。』)

【露訳】

Завязав в фуросики старые вещи, он принялся размышлять, как от них избавиться. А не спрятать ли в одной из пустевших дач? Там на них не наткнуться до будущего лета. (стр. 376)

(古着を風呂敷にくるんでから、彼はそれらをどう始末しようかと考えはじめた。空いている別荘のひとつに隠そうか。そこなら来年の夏までそれらを偶然みつけることもないだろう。)

仏訳では、あくまで銀平を叙述の対象としてとらえ、「と自問していた」という原文にはない表現を付け加えて、原文では地の文となっている②を、二重括弧でくくり、銀平の内的発話に変えるという操作をほどこしている。英訳では、主語として *It* をたてているために、銀平の内心の声とはなっていない。露訳は省略された主体が不明のまま (*she*) あるいは *me*)、地の文に銀平のイントネーションを響かせている。

また前記引用部分から少し先の、場面展開となる次の箇所では、語り手が銀平の視線を追って、銀平の目に映るものをその順番どおりに叙述してゆく様子が手にとるようにわかる。

しかし、三十歩ほど行つて振りかへつた。そのごみ箱のあるあたりから、銀色の蛾の群が霧のなかへ舞ひあがる幻を見た。銀平は取つてかへそさうとして立ちどまつたが、銀色の幻は頭の上のから松をぼうつと青く照らして消えた。
 ④から松は並木のやうにつづいてるらしく、その奥に裝飾灯のアーチがあつた。トルコ風呂だつた。(pp. 9, 10)

【英訳】

The trees stood in a row as on an avenue, at the end of which was an arched gateway decorated with ornamental lights. It was the entrance to a Turkish bath. (p. 6)

(木々は並木道にあるかのように列をなしていた、その奥に装飾灯で飾られたアーチ型の出入り口があった。それはトルコ風呂への入り口だった。)

〔仏訳〕

Les arbres alignés conduisaient à une arcade flamboyante : l'éclairage au néon d'un établissement de bains. (pp.

8, 9)

(並んだ木々は、きらめくアーチに通じていた。風呂の建物のネオンの照明である。)

〔露訳〕

Он замер и хотел было уже вернуться обратно, когда это серебристое видение промелькнуло у него над головой и исчезло, на мгновение осветив легким голубым сиянием листовничную аллею, в конце которой виднелась арка, украшенная декоративными фонариками, — вход в турецкую баню. (стр. 376)

(彼は立ち止って戻ろうかと思つたが、そのときこの銀色の幻が彼の頭上に浮かび、軽やかな青い輝きで広葉樹の並木道を一瞬照らして消えた、その並木道の行き止まりには装飾灯に飾られたアーチが、トルコ風呂の入り口が見えた。)

原文を当該部分の外国語訳に照らし合わせてみると顕著なのだが、から松の並木道がアーチまで続いていることは外国語訳の語り手にとっては既知の情報であり、原文傍線部④のような「くらしく」という推量表現はもちいられていない。原文の語り手は銀平とともに見知らぬ夜の道を歩いている。このように銀平という主人公の知覚に限定して、語り手がこ

の物語をすすめる意図をもっていることが、この第一章からはつきりと窺い知ることができ。

ところが第二章にはいると、この語り手は変貌する。物語の前景から桃井銀平が姿を消したのにもなつて、三人称語りのニュートラルな本来の立場にもどり、「ハンド・バッグ事件」を水木宮子の側から検証しはじめ。第二章冒頭において語り手は、例えば「だから銀平はこのことで信州くんだりまで逃げ歩く必要はなかつたのだと言へば言へる。」(p.38)とか「金を盗んだことがではなく、金そのものが銀平を放さないで追ひまはしたやうなものだ。」(pp.38,39)といったやうに、銀平を対象化した語り手の位置にもどる。しかしこの三人称語りは、決して登場人物である銀平や宮子の知恵や経験を大きく凌駕した全智的視点を獲得することはなく、語り手の推測はいつのまにか宮子の推測に重なつてゆき、ニュートラルであつた語り手の声にもいつしか宮子の声が響きはじめる。

次の引用は、第二章冒頭で水木宮子が20万円入りのハンド・バッグを奪われたときのことを思い起こす場面である。

道のまんなかにハンド・バッグを捨てて来た時、その場にゐたのは銀平一人で、まづ銀平に嫌疑をかけるのは当然だったが、しかし宮子は見ていたわけではないから、銀平は拾はなくて、ほかの通行人が拾つたのかもしれない。(p.39)

宮子のハンド・バッグを拾つたのが銀平であることは、銀平自身も語り手も知っていることなので、この傍線部「かもしれない」は宮子以外の推測ではありえない。また文末が現在形で結ばれているのも、物語の今を生きている宮子の推測であることをあらわしている。ここは語り手の声か宮子の心の内の声に重なつてゆく最初の箇所である。

かうして塵もつもつて、たつの貯金がどれほどの山になったか、娘のさち子からさぐり出してみたい好奇心もわいた。たつは娘にこづかひをくれる様子がないから、貯金帳も見せてゐないだらう。(p.46)

これは宮子の家に働く女中たつとその娘さち子のことを宮子が観察する場面であるが、傍線部「様子がない」「だらう」などの表現は、この部分が宮子の眼差から、宮子自身によつて語られていることを示している。

「腰に乗つかつてみてくれないか。」と老人が言つた。

「そこをやはらかく踏むんだよ。」

「私はいや……。さち子におさせになつたら？ さち子は小柄で足が小さいから、いいでせう。」

「あいつは子供だから、恥づかしがるよ。」

「私だつて恥づかしいわ。」と宮子は言ひながら、さち子はマルトよりも二つ下、マルトの恋人よりも一つ上だと思つた。それがどうしたといふのか。(p.55)

訪ねて来た有田老人の世話を宮子がするこの箇所では、「宮子は…思つた。」の文を受けて、語り手の声が「それがどうしたといふのか。」という宮子の声にすっかり重なつてしまふ。

第一章において、銀平の知覚にそつて物語を叙述するものとしてあらわれた語り手は、第二章では宮子の知覚にそつて物語を叙述する。ところが少女町枝が本格的に登場する第三章、第四章になると、語り手はふたたび銀平の限定的視点に
もどり、町枝が銀平からどのような印象を受けたか、女生徒久子が銀平をどのように評価したかという点について、彼女

たちが語る主体となることはなく、読者は銀平の目に映った表情や仕種、言葉から彼女たちの内面を察するほかない。

このように語りのレベルで整理するならば、銀平と宮子は対等であり、宮子という登場人物は久子や町枝と一緒に括られる存在でないことは明瞭である。この語りのレベルにおける銀平と宮子の対等関係を指摘した先行研究は管見では一件あり、そこでは「第二章も現行の形では不自然なところに位置しているが、ここで終わっていればそれなりに、視点人物宮子を銀平に對置させる形で、魔性の男女双方の視点で魔界が立体的に描かれ、小説としての結構は整っていた。」と指摘されている。「魔性の男女」という内容面からこの対等関係を補って考えるならば、「この反・極楽の曼陀羅の中央には、ふたりの魔族、桃井銀平と水木宮子とが、悪魔の本性をあらわして喰い合っているのか愛撫しあっているのかわからない、そういう光景がえがかれねばならない。」⁷⁾ということになるのかも知れない。

ただ第一章において読者は、銀平という主人公について、その両親の家柄とへみづうみでの事件、少年時代の初恋、教師時代の女生徒との関係、宮子とのハンド・バッグ事件、それを経て軽井沢の湯女のもとにたどり着いた銀平の、これまでの生涯にわたる情報を得ることができの対し、第二章の宮子に関しては、宮子が現在老人の愛人であることのほかには、出生や来歴、そしてなぜ老人の愛人になっているのかという点に関する情報が何ひとつ与えられていない。第三章以降において、宮子に関するこの点の不足が補われ、「魔性の男女双方の視点」から魔界の、魔族の何たるかが立体的に深められてゆくのであれば、銀平と宮子に関する第一章と第二章における情報の不均衡は問題にならないのであろうが、作品はそうは展開せず、「ふたりの魔族、桃井銀平と水木宮子とが、悪魔の本性をあらわして喰い合っているのか愛撫しあっているのかわからない、そういう光景」は描かれない。銀平と宮子はハンド・バッグ事件以後は出会うことすらない。「みづうみ」という作品は、第二章でにわかには語りの視点が宮子に移動するものの、その他全編にわたって銀平の視点から物語は展開され、その中に語る主体であったはずの宮子も吸収されていってしまう、という印象を受ける。

西欧の小説作法からすれば、このような語り視点の構成は瓊瑤と断定されるか、あるいは小説の未完性を断罪されるのであろうか、余情のままに作品を書き継ぎ、終るでもなく続くでもなく創作することを常とする作家にあつては、〈語り視点〉という欧米の言語と欧米の小説観を背景とする概念に取り込もうとすること自体が空しい試みなのであろうか。また能や歌舞伎などのように、舞台の役者が語つても、役者の代わりに地謡がその台詞を語つてもいい日本の芸術を思い起こすならば、あるいは語りの一人称性を保証する日本語の特徴を考えるならば、全く別の視角からのアプローチがこの問題には必要なのかも知れない。

Ⅲ. 「みづうみ」の物語内容

この作品に描かれる出来事は錯綜を極めているのであるが、そうした出来事を物語内容、つまり客観的な時間の流れにそつて並べてみると、次のような表にまとめることができる。

この表では、主人公銀平の少年時代から軽井沢への逃亡に至るまでの時間の流れを、古い時間から新しい時間へと、六つの部分に分けた。すなわち、【少年時代／やよい】（回想Ⅴ）、【学生時代／娼婦】（回想Ⅳ）、【高校教師時代／玉木久子】（回想Ⅲ）、【蚩狩り事件／町枝】（回想Ⅱ）、【ハンド・バッグ事件／水木宮子】（回想Ⅰ）、【軽井沢／湯女】（現在）。この六つの部分は全部で80のモチーフに分割されているが、モチーフのまとめ方は任意であり、その数は多くもなれば少なくともなる。また第二章で水木宮子の視点から描かれるハンド・バッグ事件は、別表をもうけ、①から⑩のモチーフにわけた。これを一覧表にあてはめるならば、①と②が48に併行し、③が62の一週間前、④は63と同時進行、⑤から⑩までは64と65の記述に重なる。さらに単行本にする際に削除された雑誌初出部分も参考までに復元して別表をつけた。これは一覧表の65と66の間にはいる出来事である。

【物語内容】

【少年時代／やよい】(回想V)

1. 銀平が9、10歳の頃、あちこちの波間から躍り上がり宙にとまっている鯛の夢を見て、褒められる。(p. 83)
2. 銀平が数えて11歳のとき、父親がへみづうみで奇怪な死をとげる。(p. 26)
3. 溺死した父親の頭には傷があったので、他殺ならば仇討ちをしようと誓う。(p. 79)
4. やよいから母親と一緒にやよいの家に来るよう勧められ、銀平はその提案を拒みながらも、やよいの胸を強く抱く。(p. 80)
5. 蛍の名所であった母の村のへみづうみで蛍をとり、それを蚊帳の中に放して、やよいの家族とともに寝る。(p. 96)
6. この父の死を契機に、母の里の人たちが銀平の家を忌み、やよいも銀平をうとんじ、露骨に見くだしはじめる。(p. 26, 27)
7. 銀平が12、3歳のとき、へみづうみのほとりにあるやよいの家の日本テリヤが鼠をとり、その死んだ鼠をやよいの命令でへみづうみに投げ捨てる。(p. 70)
8. やよいの針箱から赤い糸のついた縫針を盗みだし、犬の耳に

突き立てる。(p. 71)

9. みづうみの岸で野生のぐみの赤い実をとろうとして、やよいに足の醜さを指摘され、銀平はやよいの手首に噛みつきそうになる。(p. 124)
 10. 銀平は呪詛と怨恨からやよいを氷の張ったへみづうみにおびき出す。(p. 26)
(初恋の対象であったやよいはこのとき14、5歳、銀平は二つ年下。)
 11. 銀平の母の里の凍ったみづうみを歩きながら、やよいを沈めようという思いを抱く。(p. 37)
(※4〜11は順不同)
- 【学生時代／娼婦】(回想IV)
12. 銀平、東京に出て苦学していた頃、母親が胸を患って里で死に、わずかな仕送りの途絶える。銀平の家では祖父が死に、今は祖母と伯母とその娘が暮している。(p. 81)
 13. 第一回の東京大空襲で下町が大火にまみわれた後の銀平の子供の話。銀平のいた素人下宿の前に捨て子がおり、銀平さまの子ですというような手紙が添えられている。(p. 120)

14. 悪友の西村と娼家の家の裏口に赤ん坊を置いて、爽快な逃走をし、赤ん坊(女児)の生死は不明となる。(p. 121)
15. 銀平は戦地に出、西村は戦死する。(p. 122)
16. 銀平は戦地から生きてかえって、高等学校の国語の教師になす。(p. 122)
- 【高校教師時代／玉木久子】(回想Ⅲ)
17. 銀平は教え子の女生徒玉木久子を家の門まであとをつける。(p. 22)
18. 玉木久子に聞き咎められて、水虫によく効く薬を教えてほしかったとの弁明をする。(p. 23)
19. 玉木久子の洋館の家のまえから逃走し、盛り場でストリート・ガールから声をかけられ、「逃げちゃ、だめよ。」とつねられる。(pp. 24, 25, 26)
20. ストリート・ガールとの会話から、銀平は久子が心の中で銀平を追って来ていると信じる。(p. 27)
21. 翌日教室の扉の外で待つ玉木久子から薬を渡される。(p. 28)
22. 「先生の印象」という題の作文を久子から受け取った後、久子の親友の恩田信子について久子と会話。(p. 28)
23. 三、四日後、久子からももらった薬が効いたと礼を言う。(p. 33)
24. 銀平が久子の乳かくしをとると、久子はそれに目をやりながら胸をあげひろげ、泣きながら紺サアジのスカートの脚を入れる。(p. 36)
25. 教室の廊下の端で、恋の秘密を守るように久子を説得する。(p. 85)
26. 「先生は不潔です。」と銀平は恩田信子から糾弾される。(p. 89)
27. 恩田信子に久子との中を告発され、銀平は教職を追われ、久子は転校。(p. 85)
28. 焼け跡となつてゐる戦前の山の手の久子の屋敷の塀のなかで、久子と銀平は密会を繰返す。(p. 86)
29. 午後三時頃、「草葉のかげ」にむけて、久子に会うためにタクシーを走らせる。(p. 86)
30. 銀平が演説の代筆をしている会社社長の有田が久子の転校先の理事長であることを知る。(p. 92)
31. 学校帰りを家までつけてきてくれ、と「草葉のかげ」で久子が銀平に依頼をする。(p. 93)
32. 久子に誘われて家に入り、久子の居間に忍び込む。(p. 96)
33. 久子が銀平のためにコオヒ・セットを運んだことから家人に露見し、銀平は窓から逃走する。(p. 100)
34. その後銀平は久子の元の屋敷の焼け跡「草葉のかげ」へ通うが、会うことはできず、連絡もとれない。(p. 103)

35. 玉木久子は正月頃から大学進学の場合で何度も恩田信子から手紙を受け取る。(p. 106)
36. 春になり、久子の卒業式の日、「草葉のかげ」で銀平は玉木久子と恩田信子の二人に会う。(p. 103)
37. 銀平は力づくで恩田信子をタクシーに乗せて追返す。(p. 106)
38. 銀平は「さびしいみづうみの岸へ」二人で遠くに逃げようとして提案するが、久子はまだ銀平とは会わない決心を告げる。(p. 108)
39. 一年半か二年後にその「草葉のかげ」に普請がはじまり、銀平は久子に心中で別れを告げるが、その新しく建つ家は久子が結婚して移る新居であった。(p. 110)
- 【蜜狩り事件／町枝】(回想Ⅱ)
40. 坂道があがってくる柴犬をひいた少女のあとをつける銀平。(p. 68)
41. 銀平、柴犬ふくが足下に寄ってきたことをきっかけに少女に話しかけるが、ともに相手にされない。(p. 71)
42. 土手に上っていった少女(町枝)が学生(水野)と落ち合うのを銀平は目にする。(p. 74)
43. 土手の若草に腰をおろした町枝と水野の語り。(p. 76)
44. 銀平がやよいの村の(みづうみ)を回想している間に、少女は立ち去る。(p. 81)
45. 銀平は水野に歩み寄ってからみ、突き飛ばされる。(p. 82)
46. 久子の名を悲しげに呼んで、銀平はアパートへ帰る。(p. 94)
47. 明るる日の夕方、銀平は姿を隠してふたたび坂道に現れるが、少女と学生の逢引を目にするが、二人が帰りの道を変更したため、会えない。(p. 94)
48. その後幾度となく、銀平はいちよう並木の坂道をさまよう。(p. 95)
49. 二か月後(p. 115)、貸しボートのある堀で蜜狩りがあるとの記事を銀平は夕刊に見つけて出かける。(p. 110)
50. 橋に向かう途中、「矢印を取ってあげるわ。」という幻聴を聞く。(p. 112)
51. 東京の六月で、八時から蜜を放すとの掲示を見、蜜売りの店で蜜を27匹買う。(p. 113)
52. 橋の欄干から堀を見下ろす少女を銀平は見つける。三度目の巡り逢い。(p. 115)
53. 少女の左には別の学生(水木啓助)がいて、少女が町枝という名だということ、この間に一緒にいた恋人の学生水野が入院していることを知る。(p. 115)
54. 町枝の白いワンピースのバンドに蜜籠をそっとひっかけ、銀

平は立ち去る。(p.117)

55. 並木のいちよの葉に落ちる幻聴の両音を聞く。(p.117)

56. 土手にのぼろうとすると、地の裏側を這う赤子の幻覚を感じる。(p.119)

57. 町枝から遠く離れ、焦点の並ぶ明るい町に出て、煙草を買いもとめる。(p.123)

58. 「上野の地下道に先生がいらしても行きます。」という久子の予言的な言葉を思い出し、銀平は上野に姿を現す。(p.126)

59. 銀平は焼酎を飲んで店を出ると、ゴムの長靴をはいた40少前前の男のような醜い女に後をつけられる。(p.126)

60. その女をつれておでん屋風の店にはいり、女に13歳になる中学生の娘がい、夫は戦死したということを知く。(p.130)

61. 店を出て、女につれこみの安宿まで連れてこられるが、そこに女を残し、貸し二階の自室に帰る。(p.131)

【ハンドバッグ事件／水木宮子】(回想Ⅰ)

62. 銀平は同じ魔界の住人を感じたため、水木宮子のあとをつけた。(p.22)

63. さびしい屋敷町の葉屋の前で銀平は後をつけた女にハンドバッグで打たれ、逃げる。(p.20)

64. 銀平はハンドバッグを二階借りしている部屋に持ち帰る。

バッグの中には、現金20万円と預金通帳が入っており、その

通帳から女の名が水木宮子であることを知る。(p.21)

65. 通帳やハンカチを七輪で燃やし、ハンドバッグも切り刻んで日数をかけて燃やす。(p.21)

【新潮／昭和29年11月号】

1 寝入りばなに銀平は取りだした二羽の鴛を鳥籠に戻せず
に困っている久子の夢を見る。(p.243)

2 それから5、6日後に水木宮子のあとをつけ、20万円を
奪い取るという形になる。(p.244)

3 東京にいたたまれず、信州へ向かい、梅雨から真夏にか
けて、宿を泊まり歩く。(p.244)

【新潮／昭和29年12月号】

4 温泉場にいたある日の夕方、山道を散歩していて雷雨に
あい、急いで稲妻の火柱が立ったかに見えた自分の宿に
戻る。(p.111)

5 湯に入ってから、急に勘定を済ませて、宿を立つ。(p.
112)

6 女中に停留所まで見送られて、銀平はバスに乗り込む。
(p.113)

【軽井沢／湯女】（現在）

66. 銀平、信濃の安宿から安宿へと隠れ歩いてここまで来た。(p. 10)
67. 夏の終り、軽井沢の霧の夜に桃井銀平が現れる。(p. 9)
68. 犯罪者として追われているという意識をもつ銀平は着ていた古着を別荘のごみ箱に入れる。(p. 9)
69. ごみ箱のあたりから銀色の蛾の群が舞い上がる幻を見る。(pp. 9, 10)
70. トルコ風呂に入り、湯女に浴室へと案内される。(p. 10)
71. 新潟出身だという湯女の声に「幸福と救済」を感じる。(p. 11)
72. 蒸し風呂に入れられて、断頭台を思い浮べる。(p. 12)
73. 銀平はこの声のいい湯女のとをつけてゆく幻覚につかまる。(p. 14)
74. 寝椅子でうつ伏せにマッサージを受け、銀平の幼な子が額や頭を打つ幻を思い出す。(p. 15)
75. あおむけにマッサージを受けながら臉の裏に細かい釘のつまった釘箱を見る。(p. 17)
76. 湯女の脇腹に触れたら顔を殴られるだろうという思いが、青い革のハンド・バッグで打たれたことを思い出させる。(p. 18)
77. 湯女に水虫の話をし、足の爪を切ってもらう。(pp. 32, 33, 34, 39)
78. 湯女は右手の缺で銀平の手の爪を上手に切る。(p. 37)
79. マッサアジが終り、湯女に玄関まで送られる。(p. 38)
80. 夜の庭に出ると、目白がかかっている蜘蛛の巣の幻を見、目を上げると母の村のへみづらみへにうつる夜火事の火に誘われてゆくように思う。(p. 38)
- ① 《※ハンドバッグ事件／水木宮子の側から》
水木宮子は弟啓助の大学入学祝に、弟とその友人の水野、その15歳の恋人（町枝）に母の家で待ち合わせ、上野の動物園に夜桜見物にでかける。(p. 62)
- ② 夜桜見物の動物園で妻子もちの男に後をつけられ、弟啓助を大学にに入れるため貯金から金をおろす。(p. 66)
- ③ 有田老人と銀座を歩いているときにも、青い帽子をかぶった男に後をつけられる。(p. 46)
- ④ 銀座の事件から一週間後(p. 51)、(銀平に)後をつけられ、水木宮子は20万円のはいったハンド・バッグを失った瞬間に戦慄を感じる。(p. 44)
- ⑤ ハンドバッグを奪われて自宅にもどった水木宮子は女中の娘さち子にハンド・バッグを落としたと取りに行かせる。(p. 39)

- ⑥ さち子の母親で女中のたつが交番に届けることを勧めるが、宮子はそれをしない。(p. 42)
- ⑦ 戦争未亡人のたつはやはり戦争で初恋の人を失った25歳の宮子に、有田老人からもらう金をごまかして貯金をすることをすすめる。(p. 48)
- ⑧ ハンドバッグ事件から二日後の雨の夜、有田老人が訪ねてくるが、宮子はニュース映画を見に出かけていて不在。(p. 51)
- ⑨ 一時間後にもどった宮子は風呂にはいってから、老人の求めに応じてマッサージをする。(p. 52)
- ⑩ おととい(銀平に)後をつけられたことを老人に話し、魔性の女だと言われる。(p. 58)
- ⑪ 夜半、有田老人は宮子のかたわらでうなされて目をさます。(p. 66)

物語内容を整理するにあたって、モチーフの順序が不明な部分が二か所あった。ひとつは、少年時代(回想V)の部分で、4から11のモチーフである。この少年時代の回想は、銀平の年齢が明示されているモチーフのほかは、その時間的秩序がよくわからないので、表では出来事の因果関係を推測して並べてある。このように並べてみると、少年時代の出来事の回想に客観的時間秩序に基づく継起性が欠如していることが浮かび上がる。表の1から11までの数字は時間の流れに沿って付けられた番号であるが、それが示される括弧内の本文のページ数は殆どばらばらである。先行研究に「《みづうみ》はいかにも一枚の紙にすっかり印刷されてしかるべき小説だし、あたかも絵巻物のようにすべての細部が同時に存在している印象の深い反・時間的な小説である。」⁽⁸⁾という指摘があるが、それはまさにその通りであって、「時間が経つ」ということはこの作品にあつてはあまり大きな意味をもたない。

もうひとつは、久子と町枝の出来事の問題である。モチーフで言えば39と40の間に流れた時間の問題である。久子との最後の別れは卒業式の日なのでおそらく三月、銀平が坂道をあがってくる町枝をはじめ追った(第三章冒頭の出来事)のはおそらく3月末か4月であるが、これは連続した月日ではなく、あいだに久子が結婚して移る新居が建つまでの

一年半か二年、あるいはそれ以上の時間が流れたと考えればいいのだろうか。しかしだとしたら、久子と別れてから町枝を追うまでの決して短いとは言えない時間に銀平は何をし、何を考えていたのかが不明になる。物語は客観的な時間の流れ、出来事の継起性が視野にないかのように、このふたつの出来事を提示している。

IV. 「みづうみ」の物語構成

それでは時間軸に沿えばこのように並べられるはずの出来事を、作者はどのように配置したのだろうか。次の表はわれわれが現在目している「みづうみ」のモチーフ配列である。

【物語構成】

第一章

【現在／湯女】

67. 夏の終り、軽井沢の霧の夜に桃井銀平が現れる。(p. 9)
68. 犯罪者として追われているという意識をもつ銀平は着ていた古着を別荘のごみ箱に入れる。(p. 9)
69. ごみ箱のあたりから銀色の蛾の群が舞い上がる幻を見る。(pp. 9, 10)
70. トルコ風呂に入り、湯女に浴室へと案内される。(p. 10)
71. 銀平、信濃の安宿から安宿へと隠れ歩いてここまで来た。(p. 10)
72. 新潟出身だという湯女の声に「幸福と救済」を感じる。(p. 11)
73. 蒸し風呂に入れられて、断頭台を思い浮べる。(p. 12)
74. 銀平はこの声のいい湯女のあとをつけてゆく幻覚につかまる。(p. 14)
75. 寝椅子でうつ伏せにマッサージを受け、銀平の幼な子が額や頭を打つ幻を思い出す。(p. 15)
76. あおむけにマッサージを受けながら臉の裏に細かい釘のつまった釘箱を見る。(p. 17)
77. 湯女の脇腹に触れたら顔を殴られるだろうという思いが、青い革のハンド・バッグで打たれたことを思い出させる。(p. 18)

(連想の契機①) 【現在／湯女】↓【回想Ⅰ／水木宮子】

湯女の脇腹に触れたら顔を殴られるだろうという思いが、青い革のハンド・バッグで打たれたことを思い出させる。(p. 18)

【回想Ⅰ／水木宮子】

63. さびしい屋敷町の薬屋の前で銀平は後をつけた女にハンドバッグで打たれ、逃げる。(p. 20)

64. 銀平はハンドバッグを二階借りしている部屋に持ち帰る。

バッグの中には、現金20万円と預金通帳が入っており、その通帳から女の名が水木宮子であることを知る。(p. 21)

65. 通帳やハンカチを七輪で燃やし、ハンドバッグも切り刻んで日数をかけて燃やす。(p. 21)

62. 銀平は同じ魔界の住人を感じたため、水木宮子の後をつけた。

(p. 22)

(連想の契機②) 【回想Ⅰ／水木宮子】↓【回想Ⅲ／玉木久子】
水木宮子の後をつけたという思いから、銀平がはじめて後をつけた女、玉木久子のことが思いだされる。(p. 22)

【回想Ⅲ／玉木久子】

17. 銀平は教え子の女生徒玉木久子を家の門まで後をつける。(p. 9)

22)

18. 玉木久子に聞き咎められて、水虫によく効く薬を教えてほしかったとの弁明をする。(p. 23)

19. 玉木久子の洋館の家のまえから逃走し、盛り場でストリート・ガールから声をかけられ、「逃げちゃ、だめよ。」とつねられる。(pp. 24, 25, 26)

(連想の契機③) 【回想Ⅲ／玉木久子】↓【回想Ⅴ／やよい】
ストリート・ガールからつねられて、みづうみの岸で山からの微風に吹かれたようなさわかきをおぼえ、母の村のみづうみを思い出す。(p. 26)

【回想Ⅴ／やよい】

10. 銀平は呪詛と怨恨からやよいを氷の張ったへみづうみにおびき出す。(p. 26)

(初恋の対象であったやよいはこのとき14、5歳、銀平は二つ年下。)

2. 銀平が数えて11歳のとき、父親がへみづうみで奇怪な死をとげる。(p. 26)

6. この父の死を契機に、母の里の人たちが銀平の家を忌み、やよいも銀平をうとんじ、露骨に見くだしはじめる。(pp. 26,

27)

【連想の契機④】【回想Ⅴ／やよい】↓【回想Ⅲ／玉木久子】
 回想Ⅴの「へみづうみの氷」と回想Ⅲの時点の「花屋の窓ガラ
 ス」の連想から玉木久子の後をつけた回想Ⅲの時点にもどる。
 (p. 27)

【回想Ⅲ／玉木久子】

20. ストリート・ガアルとの会話から、銀平は久子が心の中で銀平を追って来ていると信じる。(p. 27)
21. 翌日、教室の扉の外で待つ玉木久子から薬を渡される。(p. 28)

22. 「先生の印象」という題の作文を久子から受け取った後、久子の親友の恩田信子について久子と会話。(p. 28)

23. 三、四日後、久子からもらった薬が効いたと礼を言う。(p. 31)

【連想の契機⑤】【回想Ⅲ／玉木久子】↓【現在／湯女】
 トルコ風呂でマッサージされる銀平の水虫から、久子の父が水虫の皮をむしっている姿を思い浮べる。(現在にもどる)(p. 32)

【現在／湯女】

77. 湯女に水虫の話をし、足の爪を切ってもらう。(pp. 32, 33, 34, 35)

【連想の契機⑥】【現在／湯女】↓【回想Ⅲ／玉木久子】
 横を向いた湯女の乳かくしを目にし、銀平は久子の乳かくしをつまんで、引いたことを思い出す。(p. 36)

【回想Ⅲ／玉木久子】

24. 銀平が久子の乳かくしをとると、久子はそれに目をやりながら胸をあげひろげ、泣きながら紺サアジのスカートに脚を入れる。(p. 36)

【連想の契機⑦】【回想Ⅲ／玉木久子】↓【現在／湯女】
 連想の契機なし。(現在にもどる)

【現在／湯女】

78. 湯女は右手の缺で銀平の手の爪を上手に切る。(p. 35)

【連想の契機⑧】【現在／湯女】↓【回想Ⅴ／やよい】
 湯女に爪を切るために手をささえられて、銀平は右手の指の

力が抜けると、氷の上をやよいと手をつないで歩きながら、銀平の右手の力が抜けたことを思い出す。

【回想V／やよい】

11. 銀平の母の里の凍ったみづうみを歩きながら、やよいを沈めようという思いを抱く。(p. 37)

(連想の契機⑨)【回想V／やよい】↓【現在／湯女】
連想の契機なし。(現在にもどる)

【現在／湯女】

79. マッサアジが終り、湯女に玄関まで送られる。(p. 38)
80. 夜の庭に出ると、目白がかかっている蜘蛛の巣の幻を見、目上げると母の村のへみづうみにうつる夜火事の火に誘われてゆくように思う。(p. 38)

第二章

《※ハンドバッグ事件／水木宮子の側から》

- ⑤ 「銀座の事件から一週間後、(p. 51)」ハンドバッグを奪われて自宅にもどった水木宮子は、女中の娘さち子にバッグを落としたと取りに行かせる。(p. 39)

- ⑥ さち子の母親で女中のたつが交番に届けることを勧めるが、宮子はそれをしない。(p. 42)
- ④ 後をつげられ、20万円のはいつたハンドバッグを失った瞬間の戦慄を水木宮子は思い出す。(p. 44)
- ③ 有田老人と銀座を歩いているときにも、青い帽子をかぶった男に後をつげられたことを思い出す。(p. 46)
- ⑦ 戦争未亡人のたつはやはり戦争で初恋の人を失った25歳の宮子に、有田老人からもらう金をごまかして貯金することをすすめる。(p. 48)
- ⑧ ハンドバッグ事件から二日後の雨の夜、有田老人が訪ねてくるが、宮子はニュース映画を見にかけていて不在。(p. 51)
- ⑨ 一時間後にもどった宮子は風呂にはいつてから、老人の求めに応じてマッサアジをする。(p. 52)
- ⑩ おととい(銀平に)後をつげられたことを老人に話し、魔性の女だと言われる。(p. 53)
- ② 夜校見物の動物園でも妻子もちの男に後をつげられた話や、弟啓助を大学にいれるため貯金からおろした金を失ったことを老人に話す。(p. 60)
- ① 有田老人が寝入ると、水木宮子は弟啓助の大学入学祝に、弟とその友人の水野、その15歳の恋人(町枝)に母の家で待ち合わせ、上野の動物園に夜校見物にでかけたことを回想する。

(p. 62)

① 夜半、有田老人は宮子のかたわらでうなされて目をさます。

(p. 66)

第三章【回想Ⅱ／町枝】

40. 坂道をあがってくる柴犬をひいた少女のあとをつける銀平。

(p. 68)

(連想の契機①) 【回想Ⅱ／町枝】↓【回想Ⅴ／やよい】

少女に話しかけようと自分を叱咤するため、右の手のひら振ったときの感触が、やよいの命令で鼠の死体を握ったときの感触をよみがえらせる。(p. 70)

【回想Ⅴ／やよい】

8. 銀平が12、3歳のとき、へみづうみへのほとりにあるやよいの

家の日本テリヤが鼠をとり、その死んだ鼠をやよいの命令で

へみづうみに投げ捨てる。(p. 70)

9. やよいの針箱から赤い糸のついた縫針を盗みだし、犬の耳に突き立てる。(p. 71)

(連想の契機②) 【回想Ⅴ／やよい】↓【回想Ⅱ／町枝】

やよいの鼠をとった犬から少女町枝の犬へ。(p. 71)

【回想Ⅱ／町枝】

41. 銀平、柴犬ふくが足下に寄ってきたことをきっかけに少女に

話しかけるが、まともに相手にされない。(p. 71)

42. 土手の上でいった少女(町枝)が学生(水野)と落ち合う

のを銀平は目にする。(p. 74)

43. 土手の若草に腰をおろした町枝と水野の語らい。(p. 76)

(連想の契機③) 【回想Ⅱ／町枝】↓【回想Ⅴ／やよい】

町枝と水野を呪う銀平には、ふたりが炎にのって水の上を流れる幻が見える。水のうへの町枝と水野からみづうみの岸辺で語るやよいと銀平へ。(p. 78)

【回想Ⅴ／やよい】

3. 溺死した父親の頭には傷があつたので、他殺ならば仇討ちを

しようと誓う。(p. 79)

4. やよいから母親と一緒にやよいの家に来るよう勧められ、銀平はその提案を拒みながらも、やよいの胸を強く抱く。(p. 80)

12. 銀平、東京に出て苦学していた頃、母親が胸を患って里で死

に、わずかな仕送りも途絶える。銀平の家では祖父が死に、今は祖母と伯母とその娘が暮している。(p. 81)

【連想の契機④】 【回想Ⅴ／やよい】 ↓ 【回想Ⅱ／町枝】

町枝の後をつけて若草に寝そべっている自分と、父のあだ討ちのためやよいの村のみづうみの岸辺の秋のしげみにひそんでいた自分との連想。(p. 81)

【回想Ⅱ／町枝】

44. 銀平がやよいの村のへみづうみを回想している間に、少女は立ち去る。(p. 81)

45. 銀平は水野に歩み寄ってからみ、突き飛ばされる。(p. 82)

【連想の契機⑤】 【回想Ⅱ／町枝】 ↓ 【回想Ⅲ／玉木久子】

学生に突き飛ばされて土手を転がり落ちたときの桃色の空と、久子に会いにタクシーを走らせていたときの桃色の空の連想。(p. 83)

【回想Ⅲ／玉木久子】

29. 午後三時頃、「草葉のかげ」にむけて、久子に会うためにタクシーを走らせる。(p. 83)

27. 恩田信子に久子との中を告発され、銀平は教職を追われ(p. 82)、久子は転校。(p. 85)

25. 教室の廊下の端で、恋の秘密を守るように久子を説得する。(p. 85)

【連想の契機⑥】 【回想Ⅲ／玉木久子】 ↓ 【回想Ⅴ／やよい】

久子への愛と、小さい銀平のやよいへの初恋。(p. 86)

【回想Ⅴ／やよい】

1. 銀平が9、10歳の頃、あちこちの波間から躍り上がり宙にとまっている鯛の夢を見て、褒められる。(p. 88)

【連想の契機⑦】 【回想Ⅴ／やよい】 ↓ 【回想Ⅲ／玉木久子】

連想の契機なし。(吉兆としての鯛の夢が実現せず、恩田に告発されたこと)(p. 88)

【回想Ⅲ／玉木久子】

26. 「先生は不潔です。」と銀平は恩田信子から糾弾される。(p. 86)

28. 焼け跡となっている戦前の山の手の久子の屋敷の塀のなかで、久子と銀平は密会を繰返す。(p. 89)

30. 銀平が演説の代筆をしている会社社長の有田が久子の転校先

の理事長であることを知る。(p. 92)

31. 学校帰りを家までつけてきてくれ、と「草葉のかげ」で久子が銀平に依頼をする。(p. 93)

【連想の契機⑩】【回想Ⅲ／玉木久子】↓【回想Ⅱ／町枝】

タクシーから見た桃色の空から土手のうへの桃色の空へ。(p. 94)

【回想Ⅱ／町枝】

46. 久子の名を悲しげに呼んで、銀平はアパートへ帰る。(p. 94)

47. 明るる日の夕方、銀平は姿を隠してふたたび坂道に現れるが、

少女と学生の逢引を目にするが、二人が帰りの道を変更したため、会えない。(p. 94)

48. その後幾度となく、銀平はいちよう並木の坂道をさまよう。

(p. 95)

【連想の契機⑩】【回想Ⅱ／町枝】↓【回想Ⅴ／やよい】

6月早々に坂道のそばの堀で催される蛍狩りの新聞記事と、蛍の名所であった母の村のみづうみ。(p. 96)

【回想Ⅴ／やよい】

5. 蛍の名所であった母の村のへみづうみで蛍をとり、それを蚊帳の中に放して、やよいの家族とともに寝る。(p. 96)

【連想の契機⑩】【回想Ⅴ／やよい】↓【回想Ⅲ／玉木久子】

湖水を照らしたす稲妻の印象から、はじめてのかたい久子にふれた印象へ。(p. 96)

【回想Ⅲ／玉木久子】

32. 久子に誘われて家に入り、久子の居間に忍び込む。(p. 98)

33. 久子が銀平のためにコオヒ・セットを運んだことから家人に露見し、銀平は窓から逃走する。(p. 100)

34. その後銀平は久子の元の屋敷の焼け跡「草葉のかげ」へ通うが、会うことはできず、連絡もとれない。(p. 103)

36. 春になり、久子の卒業式の日、「草葉のかげ」で銀平は玉木久子と恩田信子の二人に会う。(p. 103)

35. 玉木久子は正月頃から大学進学の間で何度も恩田信子から手紙を受け取る。(p. 106)

37. 銀平は力づくで恩田信子をタクシーに乗せて追い返す。(p. 106)

38. 銀平は「さびしいみづうみの岸へ」二人で遠くに逃げようと提

- 案するが、久子はもう銀平とは会わない決心を告げる。(p. 108)
39. 一年半か二年後にその「草葉のかげ」に普請がはじまり、銀平は久子に心中で別れを告げるが、その新しく建つ家は久子が結婚して移る新居であった。(p. 110)

第四章

【回想Ⅱ／町枝】

49. 二か月後 (p. 115)、貸しボオトのある堀で蛍狩りがあるとの記事を銀平は夕刊に見つけて出かける。(p. 110)
50. 橋に向かう途中、「矢印を取ってあげるわ。」という幻聴を聞く。(p. 112)
51. 東京の六月で、八時から蛍を放すとの掲示を見、蛍売りの店で蛍を27匹買う。(p. 113)
52. 橋の欄干から堀を見下ろす少女を銀平は見つける。三度目の巡り逢い。(p. 115)
53. 少女の左には別の学生(水木啓助)がいて、少女が町枝という名だということ、この間に一緒にいた恋人の学生水野が入院していることを知る。(p. 115)
54. 町枝の白いワンピースのバンドに蛍籠をそととひっかけ、銀平は立ち去る。(p. 117)
55. 並木のいちぢょうの葉に落ちる幻聴の雨音を聞く。(p. 117)

56. 土手にのぼろうとすると、地の裏側を這う赤子の幻覚を感じる。(p. 119)

(連想の契機①) 【回想Ⅱ／町枝】↓【回想Ⅳ／学生時代】
赤子の幻覚から、学生時代に下宿の門口に置かれた銀平の捨子の回想へ。(p. 120)

【回想Ⅳ／学生時代】

13. 第一回の東京大空襲で下町が大火にみまわれた後の銀平の子供の話。銀平のいた素人下宿の前に捨て子がおり、銀平さまの子ですというような手紙が添えられている。(p. 120)
14. 悪友の西村と娼家の家の裏口に赤ん坊を置いて、爽快な逃走をし、赤ん坊(女兒)の生死は不明となる。(p. 121)
15. 銀平は戦地に出、西村は戦死する。(p. 122)
16. 銀平は戦地から生きてかえって、高等学校の国語の教師になる。(p. 122)

(連想の契機②) 【回想Ⅳ／学生時代】↓【回想Ⅱ／町枝】
学生時代に下宿の門口に置かれた銀平の捨子の回想から土手の下に感じられた幻覚の赤子へ。(p. 122)

【回想Ⅱ／町枝】

57. 町枝から遠く離れ、焦点の並ぶ明るい町に出て、煙草を買いもとめる。(p.123)

【連想の契機③】 【回想Ⅱ／町枝】 ↓ 【回想Ⅴ／やよい】

連想の契機なし。(むなしくなった銀平にひさしぶりに古里のことが頭に浮かぶ) (p.123)

【回想Ⅴ／やよい】

7. みづうみの岸で野生のぐみの赤い実をとろうとして、やよいに足の醜さを指摘され、銀平はやよいの手首に噛みつきそうになる。(p.124)

【連想の契機④】 【回想Ⅴ／やよい】 ↓ 【回想Ⅱ／町枝】

やよいに指摘された醜い銀平の足から、捨子の足。(p.124)

【回想Ⅱ／町枝】

58. 「上野の地下道に先生がいらしても行きます。」という久子の予言的な言葉を思い出し、銀平は上野に姿を現す。(p.125)
59. 銀平は焼酎を飲んで店を出ると、ゴムの長靴をはいた40少

前の男のような醜い女に後をつけられる。(p.126)

60. その女をつれておでん屋風の店にはいり、女に13歳になる中学生の娘がい、夫は戦死したということを聞く。(p.130)

61. 店を出て、女につれこみの安宿まで連れてこられるが、そこに女を残し、貸し二階の自室に帰る。(p.131)

【新潮 昭和29年11月号】

- a 寝入りばなに銀平は取りだした二羽の鴛を鳥籠に戻せずに困っている久子の夢を見る。(p.243)

- b それから5、6日後に水木宮子のあとをつけ、20万円を奪い取るという形になる。(p.244)

- c 東京にいたたまれず、信州へ向かい、梅雨から真夏にかけて、宿を泊まり歩く。(p.244)

【新潮 昭和29年12月号】

- d 温泉場にいたある日の夕方、山道を散歩していて雷雨にあい、急いで稲妻の火柱が立ったかに見えた自分の宿に戻る。(p.111)

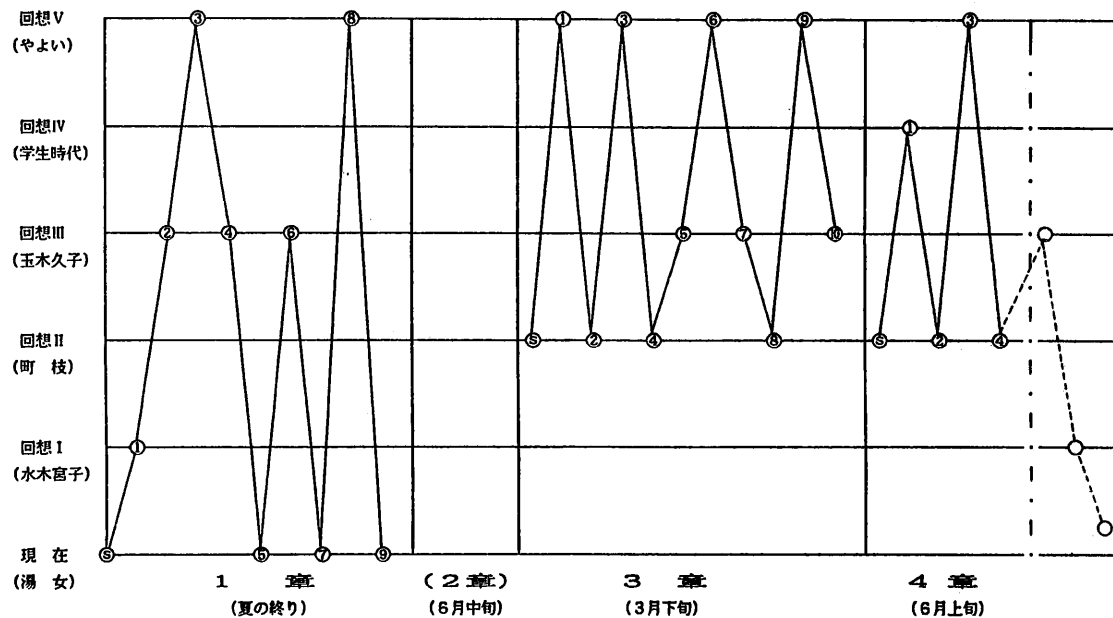
- e 湯に入ってから、急に勘定を済ませて、宿を立つ。(p.112)
- f 女中に停留所まで見送られて、銀平はバスに乗り込む。(p.113)

この表から「みづうみ」は客観的な時間の流れに基づいて構成されていないことがわかるのだが、それでは1から80までのモチーフを統御している力は何なのだろうか。その解答を見いだすまえに、物語構成を整理したことによって、次の三点が明らかになったことを確認しておきたい。

まず第一は、この物語には基点となる時間がない、ということである。ここには初秋の軽井沢に流れている時間と坂道で町枝を見つけたあとの時間が物語現在として描かれているが、桃井銀平が軽井沢で町枝とのことを回想しているわけではない。この二つの時間は、水木宮子を媒材として最終的にはつながるはずであったが、その接合部にあたる、ゴム長靴の女と安宿の前で別れ自室に戻ってから五、六日後にハンド・バッグ事件を起こすという経緯は、作家川端によって単行本になるさいに破棄されてしまったため、二つの時間はばらばらに置かれたままになっている。しかし接合部が破棄されたということ以上に注目しなければならないのは、この二つの物語現在が夥しい過去の回想に侵蝕され、物語を展開するための未来を志向していない、という点である。軽井沢での物語現在も坂道からはじまる物語現在も、銀平が自らの過去を次々と想起するためだけに進行しているかのようなのである。

そして第二に、この回想はほとんど連想を契機として生じていることがわかる。本稿の前章で検証したように、この作品は（第二章を除いて）銀平の知覚をとおして語られるのであるが、物語は銀平の意識の流れ、というより連想の流れによつて進行している。次の図表は銀平の回想の方向性をまとめたものであるが、銀平の現在の意識が回想へと動くさいには必ずと言つてよいほど連想がはたらき、無意識的記憶とでもいうべきその回想は最終的にへやよいへと向かつていることがわかる。これが第三の特徴である。

【銀平の回想の方向性】



※縦軸＝銀平の回想内容／横軸＝物語構成 ※円内の数字は連想の契機（物語構成表参照） ※2章は宮子による視点のため除外 ※---は削除された初出部分

この図表によれば、銀平の全23回の回想中、連想を契機として過去に引き戻されるのは19回におよぶ。またこの回想は、第一章の連想の契機⑥、第四章の連想の契機①を除いて（第一章⑥は湯女の乳かくしから久子の乳かくしを思い起こす瞬時の回想で本文では三行の記述であり、第四章①は赤子と捨子の連想から、町枝↓学生時代↓町枝という回想である）、直接やよいを志向するにせよ、久子、町枝、宮子を経てやよいに到達するにせよ、どれもやよいに向かっていることが確認される。さらにこの連想の内容はすべて、ヤコブソンが言語を構成し、その働きを司る二つの軸として説くところの、選択の軸（同時性の軸）上に並べられる隠喩的關係である。

本稿の冒頭で、「みづうみ」という作品の混沌を指摘したが、混沌の原因をなしているのは銀平の意識の動きであり、連想を媒介として甦るその回想にはやよいを志向するという規則性がはたらいっていることが確認できた。

銀平という主人公は現在を生きておらず、過去に呪縛されている。そしてその呪縛の源にあるのは、やよいがいたへみづうみのほとりで起きた事件なのである。銀平が過去の呪縛から解放されるためには、このへみづうみのほとりで起きた事件が解明されなければならない。なるほど教え子の玉木久子は一時的に銀平を受け入れ、町枝はその「奇蹟のやうな色気」(G.9)をたたえた美しさで銀平を捉え、水木宮子はその秘められた魔性で銀平を引きつけ、湯女はその天女のやうな声で銀平に「清らかな幸福と温かい救済」(G.11)を感じさせたとしても、決して銀平の回想はやまない。「眠れる美女」の江口老人の前に次々と現れる女たちと同じように、銀平の前に現れては消えるそうした女たちは、結局へみづうみの出来事の反映に過ぎず、銀平が目の前の現実を正面から見据え、相対峙するためにはどうしてもへみづうみのほとりで起きた出来事の原因が解明されなければならないのである。

ところが、へみづうみのほとりの名家の出であった母が格下の家の出身である父と結婚したことの謎、へみづうみの父の奇怪な死の謎を解決するための材料は、この「みづうみ」という作品には提供されていない。銀平が事件の真相を

知らないばかりではなく、三人称の語り手までも、銀平以上にはこの事件の真実を知らない。したがって読者が銀平の母親やへみづうみへの事件について憶測をたくましくするのは自由だが、原理的にこの謎は永遠に解決されることがない。そもそもこの「みづうみ」という作品にあつては、物語の中心に位置するはずのへみづうみにおける銀平の父の死を客観的に究明しようとする志向がまったくなく、物語の中心は空白のまま放置されている。

V. 「みづうみ」のジャンル

かくてこの作品の焦点は、へみづうみへのほとりで起きた事件の客観的解明ではなく、何か分からない幼少時の記憶に苦しめられ続ける銀平という主人公の感情にあわせられていることがわかる。そしてこのへみづうみへの事件の全容が解明されたとしても、銀平が幼少時に負った心的外傷が決して癒されないとすれば、銀平にとって事件を究明することはたしかに意味のないことなのかも知れない。

作品の焦点が銀平の感情にあわせられていることを裏打ちするかのようには、物語を動かしてゆく力は、銀平の隠喩的連想である。高山鉄男氏はヤコブソンが失語症の研究をとおして発見した、言語における隠喩と換喩の原理を援用し、次のように指摘している。「川端氏の言語は、いかなる意味においても述語的ではない。生のうちに死を見、人間の悲しみを大いなる自然の、生命の流れのうちにとらえようとした氏の文体が隠喩的であることは必然である。氏の小説は物語それ自体においてさえ隠喩的なのだ。それは行動と状況の変化とを物語つたものではなく、つまり述語的なものではなく、主人公の自我が、自己の情緒に対応する類似物を次々と発見していく過程を描いたものだからである。¹⁰⁾」

川端の「みづうみ」について、へ意識の流れへの手法という批評がなされるとき、おそらくその前提となっているのは、J. ジョイスやM. プルーストの散文であろう。しかし単純化を恐れずに言えば、「ユリシーズ」におけるへ意識の流れへ

の描写で特徴的なのは、神話的対応を背景に登場人物たちの目に映る光景につれて動く意識を逐一記述してゆくことであり、またブルーストの主人公の内的独白は、例えば教会の正面玄関からステインド・グラス、タペストリー、後陣、鐘塔といったように、結合の軸上できわめて換喩的に進行する過去の回想、探究であるのにたいし、川端の「みづうみ」における「意識の流れ」の手法とは、集積された過去の断片を繋ぎあわせて物語を展開する隠喩的連想なのである。

ヤコブソンの言うように、詩が隠喩によって、散文が換喩によって言葉の展開をおこなっているとすれば、隠喩的進行によって成立しているこの「みづうみ」という作品は、西洋的意味における小説という概念を解体しているといえる。

西洋の小説とは具体的な時空間を設定し、そこに登場する人物の性格、心理、思想を、そこに生起する社会的出来事の原因と結果を分析、説明するはずのものなのに、「みづうみ」という作品は、抒情詩の主人公でありまた語り手でもある「私」が抒情詩特有の無時間、無空間のなかで抒情的吐露をおこなうように、時空間の拘束にとらわれず、事件の説明と説明に拘泥することなく、主人公銀平の幼少時に傷を負った感情をひたすら追い続ける物語なのである。

「みづうみ」を筆頭に川端のいくつかの作品は、小説と抒情詩の中間に属するジャンルに位置づけるのがふさわしいように思われる。日本文学の伝統のうち求めるならば、「歌物語」というジャンルの系譜を思い起こさせる。例えば、「雪国」という川端の代表作なども、「小説」と呼ばれているが、もしこれが小説なのであれば、軍国主義の暗い抑圧的な足音が響きはじめる時代背景の説明がなされ、東京における島村の生活や性格の由来、人生観が明示され、それらが雪国に暮らす駒子の生き方と対照され、東京の妻を選ぶか、雪国の芸者を選ぶか、という選択が同時代には滑稽だったとしても、時代の慣習を越えて相手の愛情に応えようとする、あるいは応えることのできない島村の心理と思考のプロセスと結論が説明されるべきなのである。しかし、「雪国」という作品はそうしたことは黙殺するかのように、あるいは視野にないかのように、ただただ島村の冷ややかな鏡に映る自然の美と駒子の生々しい生の歌い上げそれ自体にあらゆる力が注がれてい

る。

歌物語はなるほど「歌を中心としてその成立事情を語る物語」⁽¹¹⁾であり、こうした川端の作品の要所々々で短歌が詠まれているわけではないが、出来事の解明や分析ではなく、入り組んだ感情を芸術の言葉にかえる、言葉そのものが目的であるところの、和歌への結晶を志向する歌物語と同じ方向性を川端の作品も有しているのではないだろうか。仏訳「みづうみ」の批評では「この小説（ロマン）はいかなる伝統的形式にも含まれない。これは一種の《パプニング》である」と論じられているが、川端における西洋の前衛と日本の古典との出会いはこうした点にも認められる。

かくて第二章の水木宮子の視点からの語りという問題を棚上げして結論づけるならば、「みづうみ」という作品は信州から信州へという構成においても、やよいからやよいへという主人公の意識においても完全な円環性をもつて特徴としているように思われる。そして主人公銀平にこの円環の中心にあるへみづうみに立ち戻って謎を解明しようとする志向がなく、また解明したとしても心にうけた傷が決して癒されないことを知っており、癒して過去に訣別する方途がないとすれば、銀平は宮子のあとに続く第四、第五の女を追い続ける宿命にあるはずである。したがって単行本になるさいに削除された雑誌結末部分は、削除する必然性はなく、作品の内的生命は初出のとおり銀平の永遠の彷徨を示唆してその輪を閉じようとしていた。いやすでに閉じたのである。この永遠の堂々巡りを、作品内では自壊していかない円環構造を、力づくで断ち切ったのは作家川端康成であり、その意味でもこの「みづうみ」という作品は、作家川端の生を反映しているのかも知れない。

【注】

作品「みづうみ」の引用は『川端康成全集 第一八巻』（昭和五五年）により、引用の末尾に頁数を括弧内に示した。

- (1) 川端康成編 『湖』(有紀書房 一九六一年)
- (2) 小佐井伸二 「川端康成頌」(「文芸」 昭和四三年二月)、中村真一郎 『みづうみ』解説(三枝康高編『川端康成入門』所収 有信堂 昭和四四年)など。
- (3) 月村麗子 川端康成著『みづうみ』の主題と方法(「解釈」 昭和五二年一月号)
- (4) 英訳 *The Lake*, translated by Reiko Tsukimura, Kodansya International, Tokyo, N. Y., London, 1974.
 仏訳 *《Le Lac》* Yasunari Kawabata, traduit du japonais par Michel Bourgeot, Albin Michel, 1978.
 露訳 *《Озеро》*, в кн. Якутари Кавабата. Избранные произведения, Пер. Б. Раскина, М., 1986.
- (5) 本文に章づけはされていないが、便宜上先行研究に従い、行あげ箇所を基準に四章立てと見なす。
- (6) 原善 「みづうみ」論(『川端康成の魔界』 有精堂 一九八七年)
- (7) 大江健三郎 「みづうみ」について(「文藝」 昭和三八年八月)
- (8) 大江健三郎 前掲論文
- (9) R. ヤコブソン 『一般言語学』(みず書房 一九七三年)
- (10) 高山鉄男 「悲しみと日々」(季刊 藝術)第一九号 昭和四六年(一〇月)
- (11) 渡辺実 「解説 伊勢物語の世界」(「新潮日本古典集成 伊勢物語」 新潮社 昭和五一年)
- (12) 仏訳『みづうみ』 前掲書

附記 本稿は川端文学研究会第二三回大会(平成八年六月三〇日、於・二松学舎大学)における口頭発表をまとめたものであり、そのさい会員の方々から貴重なご教示をいただいた。